

と記され、可汗は會昌元年八月既に塞上に在りしが如し、然るに又通鑑會昌元年十一月の條に引ける李德裕の上言には

「今回鶻破亡、太和公主未知所在、若不遣使訪問、則戎狄必謂、國家降主虜庭、本非愛惜、既負公主、又傷虜情、請遣通事舍人苗縝、齎詔詣噶沒斯、令轉達公主、兼可卜噶沒斯逆順之情」從之

と見ゆ、太和公主は黠戛斯が回鶻を破りたる時、黠戛斯の得る所と爲りしが、黠戛斯が之を護送して唐に致さんとせし時、舊書廻紇傳によれば「烏介途遇黠戛斯使達干等、並破殺、太和公主却歸烏介、可汗即質公主同行、南渡大磧、至天德界」と見え、新書回鶻傳にも、可汗は黠戛斯に破られし後、南の方錯子山を保ちしが、黠戛斯の使者なる達干等が、其の得たる太和公主を唐に送致せんとするや「烏介怒擊達干、殺之、劫主南渡磧」と記さる、李德裕の奏言によれば、會昌元年十一月の初には太和公主の所在は、尙唐には明かならざりしと曰へば、從て之を擁したる可汗の所在も不明なりしなるべく、此の時迄に既に可汗が塞上に營を置きしものは考ふ可らず、而して此等諸種の記事中、李德裕の奏せる所が最も確かなるべきは、通鑑が同年九月の條に引ける實録に

十一月初猶未知公主所在、遣苗縝至噶沒斯處訪問、月末始云、公主遣使、言烏介可汗無冊命及降使宣慰、十二月庚辰制曰、公主遣使入朝、已知新立可汗寓居塞下、宜令王會慰問、仍賑米二萬石

と見え、又唐會要^{卷六}和蕃公主の項末に附せる雜錄に、之と同じく

會昌元年十一月勅、緣回紇國中離亂頗甚、太和公主恐未安寧、須遣文臣、專往訪問、宜差通使舍人苗縝^{（縝之誤）}充使